

## 学校の校内授業研究と連携した取組

—取り組みやすい授業を作る—

特別支援教育センター指導主事研究会議

伊藤 琢也

滝口 久奈

徳永 由紀

松原 晴美

宮川 淳子

### I 主題設定の理由

#### 1 川崎市の現状と課題

川崎市では、平成16年度より特別支援教育を推進し、施策として川崎市特別支援教育体制充実事業を実施している。事業の長期的目標として「必要な支援が必要な時に必要な児童生徒に提供されるための体制整備」「特別な教育的ニーズがある児童生徒だけでなくすべての児童生徒が充実感を味わうことができる授業づくり」の2点において取り組んできた。具体的には、小・中・高等学校各校の学校長が特別支援教育(児童支援)コーディネーターを指名し、校内委員会を設置した。そして、そのコーディネーターが、校内で特別支援教育の推進を中心的に担い、校内組織の充実を図ってきた。それぞれの学校の重点目標として、

①教育相談の充実 ②校内委員会の充実 ③指導形態、指導方法の充実 ④外部機関との連携の4点について推進しており、支援が必要な児童生徒に対して、必要な支援が必要な時に提供されるための体制整備が一定程度整ったと考えることができる。

また、平成16年度以降の川崎市の特別支援教育の現状として、

- ①通常の学級における個別の支援(取り出し授業など)が必要な児童生徒数の増加(表1)
- ②小・中学校通級指導教室入級児童生徒の増加
- ③特別支援学級入級児童生徒の増加
- ④特別支援学校高等部の過大規模化

の傾向が見られる。

個別の支援が必要な児童生徒の増加については、特別支援教育において国が新たに対象とすべき障害種を示し、学校においては、研修などにより発達障害の理解が広がり、個別の支援の必要性が認識されてきたこと、また保護者の理解が深まり、早くから医療機関、療育機関に相談することが増えたことが要因として考えられる。

個別の支援が必要と考えられる児童生徒の一人一人に対して、十分な人的資源を求めることは現状として困難である。また、本来特別支援教育とはすべての子どもがそのニーズに応じた支援を受け、できる限り同じ場で学ぶことを通じて学習に参加している実感や達成感を持ちながら、充実した時間を過ごす中で助け合い、支え合って生きていく力を身につけることを目指してい

表1 H26.7 川崎市「特別支援教育体制充実事業アンケート結果」とH24.12 文部科学省「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」より

	通常の学級に在籍の児童生徒数	支援が必要な児童生徒数	川崎市における割合*	全国における割合
小学校	71,434人	6,112人	8.6%	7.7%
中学校	28,816人	1,027人	3.6%	4.0%
高等学校	4,788人	115人	2.4%	

\*川崎市の「特別支援教育体制充実アンケート結果」は校内委員会にあげられた支援が必要な児童生徒数の割合である

くものである。支援が必要な児童生徒も学級の一員であるという認識の中で、すべての児童生徒を対象とした「安心できる学級づくり」「取り組みやすい授業づくり」を再検討していく必要がある。ここでいう「取り組みやすい授業」とは環境設定やどのような学習活動をするかなどの見通しを持たせることで、児童生徒が学習活動に集中しやすいことをいう。

平成 26 年度の体制充実事業では、学校が設定する重点目標として

①教育相談の充実 ②校内委員会の充実 ③指導形態、指導方法の充実

の 3 点を示し、各校での取り組みを勧めている。

小・中学校の約 3 分の 1 は、③指導形態・指導方法の充実を重点目標として選択しており、「学級づくり」「授業づくり」への意識が高まってきているのが分かる。また、高校でも「学級づくり」「授業づくり」への視点をもって学校全体で取り組もうとしていることが分かる(図 1)。

## 2 主題設定の理由

2012 年の文部科学省による『通常学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果』には、

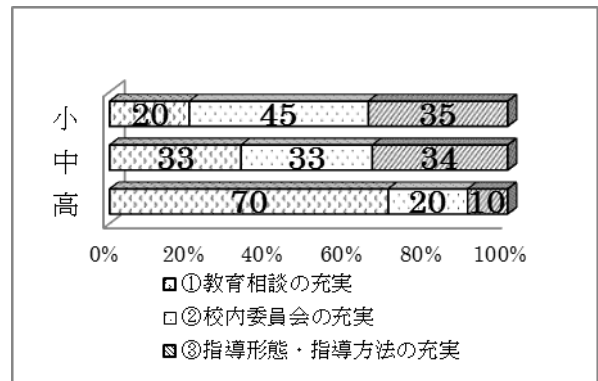


図 1 各学校における重点目標

学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒を取り出して支援するだけでなく、それらの児童生徒も含めた学級全体に対する指導をどのように行うのかを考えていく必要がある。(中略)学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒が理解しやすいよう配慮した授業改善を行うなどの対応を進めていくべきと考える。

と記されている。これは、支援が必要な児童生徒に対して「取り出して支援を行うこと」だけでなく「学級全体に対する指導を行うこと」を考えていく必要性を指摘している。また、「理解しやすいよう配慮した授業改善を行うこと」を進めていく必要性も指摘している。つまり、一斉指導の中で、支援が必要な児童生徒も包括した授業づくりをしていくこと、支援が必要な児童生徒が理解しやすい授業になるように改善していくことが必要だということを伝えている。

では、支援が必要な児童生徒に対する理解しやすいよう配慮した授業改善とはどのようなことであろうか。

例えば、音や視覚的な刺激、気温などの刺激に弱く、集中できずに席を立ち歩き、一見理解が難しいとみられる児童生徒は、刺激を調整したり、見通しを持たせたりすると集中し取り組みやすくなることもある。手先が不器用で書くことが苦手だったり、道具をうまく使えなかったりする児童生徒は、書く量を減らす、道具を工夫する、書く以外の活動を取り入れる等の工夫により学習に組みやすくなることが考えられる。

また、文章を読んでイメージをすることが苦手な児童生徒には、写真や絵や図を使って示すことでわかりやすくなる。抽象的な言葉だけでは理解できない児童生徒には、見本を示したり、具体的な言葉で伝えたりすることでわかりやすくなる。教師の授業づくりの工夫がわかりやすさにつながっている。ここでいう「わかりやすい」とは、どんな学習活動をするかがわかりやすいということで、問題や学習内容を簡単にするのではない。算数であれば、答えがわかる、なぜそのような立式をするかがわかる、他の児童生徒との考えの違いがわかる、他の解き方がわかる、など様々な「わかる」があ

る。授業の中で最終的に求められる「わかる」とは、やはりその授業のねらいに基づいて考えていく必要がある。つまり、児童生徒が授業のねらいに迫れるように、教師が理解しやすくしていくことが大切である。

このような、支援が必要な児童生徒に対する授業について、桂聖(2014)は次のように述べている。<sup>1</sup>

授業のユニバーサルデザインの基本的な考え方はどのクラスにもいる、発達障害の可能性のある子、学力が劣りがちな子に対する工夫や配慮が、クラスの他の子にも、楽しく「わかる・できる」授業づくりに通じるというものである。つまり、特別支援教育の視点を取り入れて、教科教育の授業改善をすることである。そして、指導の工夫は「焦点化」・「視覚化」・「共有化」の3つの視点から手立てを考えることが有効である。「焦点化」とは授業のねらいや活動を絞ること、「視覚化」は視覚的な手がかりを効果的に活用すること、「共有化」は話し合い活動を組織化することである。

本研究では「ユニバーサルデザインの授業づくり」という視点に立ち、すべての児童生徒にとって取り組みやすく、わかりやすくするための授業の工夫について「焦点化」「視覚化」「共有化」の3つの視点を参考にして授業づくりを行っていくこととした。校内授業研究と授業実践の中で、授業の工夫や児童生徒との関わりを継続的に検討し、共有していく。そうすることで、学校そのものの支援力を高め、児童生徒にとって「取り組みやすい、わかりやすい授業づくり」ができるのではないかと考え、研究主題及び副題を以下のように設定した。

学校の校内授業研究と連携した取組—取り組みやすい授業を作る—

今年度、本研究は研究の場を市内小学校とし、国語の授業を通して検証することとした。また、研究仮説を「支援が必要な児童生徒に配慮した授業づくりについて、年間を通じて校内授業研究で検討することにより、教師の意識が変化し、日々の実践につながっていく」とした。

一方、授業は教科のねらいに即して組み立てるものであるもので、教科としての専門性については、カリキュラムセンターの協力も得て進めることにした。

## II 研究の内容

市内の1小学校の協力を得て、学校の年間6回の校内授業研究に参加した。研究協議会は「国語の授業づくり」と「ユニバーサルデザインの授業づくり」の2つの視点で行った。

表2 研究の日程と授業

第1回	6月 6日 (金)	全体会	「ユニバーサルデザインの授業づくり」研修 「取り組みやすい授業」アンケート実施〈第1回目〉
第2回	7月 9日 (水)	6年	講師：教科指導 (市内小学校教頭) 指導課 (支援教育担当)
第3回	7月 15日 (火)	5年	講師：教科指導 (市内小学校教頭) 特別支援教育センター
第4回	9月 10日 (水)	1年	講師：教科指導 (大学講師) 特別支援教育センター
第5回	10月 30日 (木)	2年	講師：教科指導 (大学講師) 特別支援教育センター
第6回	11月 12日 (水)	3年	講師：教科指導 (大学講師) 特別支援教育センター
第7回	1月 15日 (木)	4年	教科指導 (カリキュラムセンター 初任研相談員) 特別支援教育センター 「取り組みやすい授業」アンケート実施〈第3回目〉

各回、学年ごとに全学級の授業を公開した。どの学年も同じ単元、指導計画で授業を行い、本時の時間をずらしての公開を行った。そして、指導案の分析、研究協議会の分析、教師の意識の変化の分析をすることとした。以下、その結果を述べる。

<sup>1</sup>桂聖・小貫悟編著 西尾市立西尾町小学校著『文学教材のユニバーサルデザイン』pp16-18 東洋館出版 2014

## 1 指導案の分析

本研究の趣旨は校内授業研究を通して、「ユニバーサルデザインの授業づくり」についての教師の意識の変化を追うものである。したがって、指導案検討の段階では特に助言は行わずに、授業を実施する担任及び学年の意思を尊重した。

指導案には『手立て〈ユニバーサルデザインの視点から〉』という項目があり、どのような目的でその手立てを取り入れたのかということが記載されている。6回行われた校内授業研究の指導案の中から、各学年の『ねらい—実態—手立て』を要約した(表3)。

表3 指導案の要約

	単元目標と指導事項	児童の実態	手立て〈ユニバーサルデザインの視点から〉
第2回	<p>討論会の話題に沿って話し手の意図を捉えながら聞き、自分たちの意見と比べるなどして考えをまとめることができる。</p> <p>互いの立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合うことができる。</p> <p>指導事項: 話すこと・聞くこと(ア)・(エ)・(オ)</p>	<p>相手の意図を捉えながら聞いたり、自分の考えと比べて話を聞いたりするような聞く力は十分とは言えない。話すことについては明確に伝えられるように話の構成を工夫したり、場に応じた言葉遣いで話したりすることはもう少し練習が必要である。</p>	<p>【ワークシートの工夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・目的に応じたワークシートを作成し、伝えやすくなるための工夫をする</li> </ul> <p>【見通しを持たせる工夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・単元の流れを表にまとめて提示し、見通しを持たせる</li> </ul> <p>【個に合わせた工夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・調べ学習が苦手な児童にとってのヒントになるものとして個別学習用資料を用意する</li> </ul>
第3回	<p>伝記を読んで自分の生き方について考えよう。</p> <p>指導事項: 読むこと(1)オ</p>	<p>少人数での友だち同士の意見交流には抵抗なく取り組めるが、全体の前で話をしたり、発表したりすることには消極的な子が多い。書くことに抵抗を感じている子が少なくなく、語彙が乏しい子や文章構成(主・述の関係など)が理解不十分な子もいる。</p>	<p>【ワークシートの工夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・項目に従って整理できるワークシートを用意する</li> <li>・書く分量を少なくし、簡潔にまとめられるようにする</li> </ul> <p>【付箋紙の活用】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・読み取りを進める中で、自分の考えを付箋に記入し、その根拠となる叙述の近くに貼っていく</li> </ul> <p>【見通しを持たせる】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・単元全体のねらいや学習の予定、方法を単元の初めに確認し、見通しを持たせる</li> </ul> <p>【共有化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ペア学習やグループ交流の場面を設定し、全体に広げていく</li> </ul>
第4回	<p>登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むことができる。</p> <p>指導事項: 読むこと(1)ウ</p>	<p>音読の課題にはよく取り組んでおり、ほとんどの子は音読の練習をすることで、すらすら読むことができるよう</p>	<p>【焦点化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・前時の確認をする</li> <li>・動作化をする</li> <li>・多様な話型を示す</li> </ul> <p>【視覚化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習の見通しを持たせる</li> <li>・台本を拡大印刷して教室の壁や黒板に貼る</li> </ul> <p>【共有化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ペア学習、グループ学習の形態をとる</li> </ul>
第5回	<p>場面の様子について、登場人物の行動や会話を中心にその心情を想像しながら読み、声の出し方などを工夫して音読劇をすることができる。</p> <p>指導事項: 読むこと(1)ウ</p>	<p>音読に関して抑揚をつけたり表情を豊かにしたりして登場人物になりきって堂々と読む児童もいる反面、よく意味を考えずに読んでいる児童や動きの工夫の仕方が分からないままに読んでいる児童もいる。</p>	<p>【焦点化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・場面ごとの大切な表現に着目させる</li> <li>・既習の学習を活かす</li> </ul> <p>【視覚化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「お手紙ノート」の活用</li> <li>・人物シールを貼って誰の言葉かわかりやすくする</li> <li>・音読ポイントカードの作成</li> <li>・思考を書き残せるようにする</li> <li>・動作化を行う</li> <li>・挿絵カードの利用</li> </ul> <p>【共有化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一人→小グループ→全体の活動のスタイルで学習をする</li> <li>・代表児童による発表</li> <li>・読み聞かせを行う</li> </ul>

第6回	場面の移り変わりに注意しながら読み、人物の行動、情景、会話などの表現に着目して読むことができる。 指導事項:読むこと(1)ウ 書くこと(1)カ	登場人物と自分自身を比べて考えたことを発表し合う活動をしているが、登場人物の行動から気持ちを想像しながら読むことができない児童もあり、想像力に大きな個人差がある。また、自分の考えや思いを伝えることを苦手としている児童も多い。	【焦点化】 ・挿絵の活用 ・センテンスカードの活用 ・ワークシートの工夫 【視覚化】 ・挿絵を黒板に掲示する ・ファイルを使用する 【共有化】 ・代表児童による発表
第7回	場面の様子を表す言葉や表現に着目して物語を読み、作品の紹介文を書く。 指導事項:読むこと(1)ウ・オ	読書好きな子が多く、ちょっとした時間を見つけて読書をしている。物語や詩を読んで、独特の感性で感想を書く子もいる。	【焦点化】 ・紹介文を書くという明確な目的をもたせる ・学習の道筋を単元の初めに示す ・全文を十分音読する ・教科書に線を引いてからワークシートに書くようにスモールステップで進める ・交流するときのポイントをはっきりさせる ・教師がモデルを示す 【共有化】 ・並行読書をして他の作品の紹介文に取り組めるようにする。

各指導案で示される支援の手立ては、「ユニバーサルデザインの授業づくり」の視点からだけでなく、「国語の授業づくり」からも示されていた。指導案に記載されていた「ユニバーサルデザインの授業の視点からの手立て」をまとめてみると、

焦点化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・着目点を明確にして伝える</li> <li>・ワークシートを工夫し、前時までの積み重ねが見える形にする</li> </ul>
視覚化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・思考する場面で挿絵を活用する</li> <li>・色分け、シールを貼るなどして見やすく整理できるようにする</li> </ul>
共有化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小グループで話し合う時間を設定し、そのあと全体で共有する</li> <li>・代表児童による発表を行う</li> </ul>

であった。これらの手立ては、校内授業研究会を積み重ねていく中で「当たり前の手立て」として認識されてきた。ワークシートの工夫による取り組みやすさ、視覚的な提示によるわかりやすさなどについては今までも授業の中で行ってきた手立てだと思われる。「ユニバーサルデザインの授業づくり」という共通の視点を持って校内授業研究で協議したことにより、これらの手立てを価値付けすることができた。

これらの手立てが適切であったかについて検証するためには、児童の実態をふまえて考えることが必要である。指導案の中では「読むこと」を指導事項として挙げている学年が多かったが、その場合、「読むこと」についての実態を捉えることが大切である。例えば、「読むこと」について児童の実態を細かく見ていくと下記ものが挙げられる。

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>①文中の漢字の読み方がわかって読む</li> <li>②文中の言葉の意味がわかって読む</li> <li>③文章から状況をイメージして読む</li> <li>④文章から心情を想像して読む</li> <li>⑤行動、情景、登場人物の相互関係、描写などに着目して読む</li> <li>⑥自分の考えと友だちの考えを関連付けながら読む</li> </ul> |
|--|

学級の児童の実態はどうか、支援を必要とする児童がどのくらいいるのかなどの実態把握を行い、ねらいを達成するための必要な手立てを考えていくことが大切になるのではないだろうか。

指導案には指導事項にあたる児童の実態が明確に書かれていなかったため、指導案からは『ねらい—実態—手立て』の関連性が見えにくかった。しかし、ねらいに迫るための手立てになっていたかということについては検証していく必要があり、児童の実態がなくては適切な手立てになっていたのか

はわからない。『ねらい—実態—手立て』の関連性については研究協議会の分析でさらに考えていくこととする。

## 2 研究協議会の分析

協力を依頼した小学校では、

「自分の思いや考えを持ち、互いに伝え合う〇〇っ子～どの子にもわかりやすい国語の授業づくり～」

を研究テーマとして校内授業研究に取り組んでいる。

〈研究協議会の進め方〉

- ① 「国語の授業づくり」と「ユニバーサルデザインの授業づくり」の視点で気づいたことや成果、課題を付箋に記入した。
- ② 4～5人のグループで話し合い、それを全体で共有した。

各回の研究協議会で出された意見をまとめてみた(表4)。

表4 研究協議会で出された意見

	効果があると思われた手立て	検討を要する事項
第2回	<p>【見通しを持たせる】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・活動の流れが見やすく、見通しが持てた。</li> <li>・単元全体の見通しがあってよかった。</li> </ul>	<p>【ワークシートの工夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・罫線があるもの、ないものなどタイプの違うワークシートを用意してもよかった。</li> </ul>
第3回	<p>【話型を示す】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・根拠が明らかになり、発表が苦手な子でもパターンに当てはめることで安心して発表できていた。</li> <li>・自信をもって発表できる。</li> <li>・発表の仕方がわかる。</li> </ul> <p>【ワークシートの工夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・書けない子にも取り組みやすい形式であった。</li> <li>・板書とワークシートが同じになっていたのは、文の内容を拾いこむ時の有効な手立てになっていた。</li> <li>・吹き出しがあり、取り組みやすかった。</li> </ul> <p>【見通しを持たせる】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・どこを学習しているのかわかる。</li> <li>・これからどんな学習をしていくかがわかる。</li> <li>・学習の流れがつかみやすい。</li> </ul> <p>【視覚化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・付箋の使い方として、色分けをしていることが分かりやすさにつながっている。</li> </ul>	<p>【ワークシートの工夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「書き方の例」は段階があってもよかったのではないかと。バリエーションがもっとあるとよかった。</li> <li>・ワークシートは良く書けていた子でもかなり誤字があったのが気になった。</li> </ul> <p>【共有化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・意見を言う、聞くという一方通行になっているのは、交流になっているのだろうか。関わり合いと言えないのではないかと。</li> <li>・筆者の読み取りと意見の交流を分けたほうがよかった。</li> <li>・読み取りの中心になるところにもう少し時間をかけるとよかった。</li> </ul>
第4回	<p>【視覚化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教科書を拡大して書き入れていくやり方は分かりやすい。</li> <li>・カラーペンでの色分けは分かりやすい。</li> </ul> <p>【動作化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どものやりたい気持ちを生む</li> <li>・1時間の中で立って行う活動が取り入れられていてよかった。</li> <li>・先生と子供のモデルは分かりやすい。</li> </ul>	<p>【視覚化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・書き込みが多いと見づらい。情報量が多すぎだった。</li> <li>・視覚的な分かりやすさを考えると情報量の精選が必要。</li> <li>・文字の情報量が多すぎだった。気持ちの移り変わりなどは表情カードなどを使ってもよかった。</li> <li>・色が多くてどのように分けてあったのかわかりにくい。</li> <li>・お助けカードは文字情報を少なくすると分かりやすい。</li> <li>・単元で身につけさせたい力を明確にするとよかった。</li> <li>・お助けカードは初めの情報としてだけにして、そのほかは困っている子に対してだけ使うとよかった。</li> </ul> <p>【動作化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・動作化が後ろの子には全く見えなかった</li> <li>・劇化することで何を引き出したかったのか。</li> <li>・言語を増やす動作化は全員でやるとよかった。</li> <li>・動作化をして表現することで意味理解をどう入れていくとよかったのか。</li> <li>・雷の様子を読み取る場面と動作化をして読み取る内容が区別されていないのではないかと。</li> <li>・動作化によって文章の意味理解につなげていくのではないかと。</li> </ul>

第5回	<p>【共有化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小グループで確認することで、全体の場で安心して発表できていた。</li> <li>・板書がそのままコピーされていて振り返りに有効であった。</li> </ul> <p>【視覚化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全員にさし絵カードがあり、話の流れの関係や気持ちを読み取るうえで有効的であった。</li> <li>・気持ちのバロメーターは分かりやすかった。</li> <li>・誰が話をしたのかが分かるように色の違うシールを貼ったのは分かりやすかった</li> </ul>	<p>【共有化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グループだけでの音読練習ではやり方に困っているところがあった。</li> <li>・なぜそういう気持ちなのか、どういう根拠なのか分からない子がいた。</li> <li>・交流（発表）の場面は活発であったが、互いの考えの交流にはなっていなかった。</li> <li>・誰が話したのかが分かっていたのだろうか。登場人物の様子や気持ちはわかってはどうしてそういう気持ちになるのかが分からずに子がいた。</li> </ul> <p>【焦点化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「なりきって読む」という具体的な姿が示されていなかった。</li> </ul>
第6回	<p>【視覚化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・挿絵や会話、キーワードが貼られていて場面の流れが分かりやすかった。</li> <li>・これまでの学習のふりかえりの情報量がちょうどよいと感じた。</li> <li>・行動や会話の短冊が色分けしてあるのは分かりやすかった。</li> <li>・気持ちを表す言葉の拡大プリントは思い出すためによかった。</li> </ul> <p>【ワークシートの工夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・話の流れが分かりやすかった。</li> </ul> <p>【焦点化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「気持ちの例」が掲示されていて書けない子にとっての手がかりになっていた。また、個別にも渡されていてよかった。</li> </ul>	<p>【視覚化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・読み比べる時の手がかりとして挿絵を有効に使えるとよかった。</li> </ul> <p>【ワークシートの工夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートには区切りの線があると書きやすかった。</li> </ul> <p>【焦点化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・どこかに焦点化した発問やねらいに迫る活動があるとよかった。一人一人の読み深めをどう見取って評価につなげていくのか。</li> </ul> <p>【共有化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教師と子どもの1対1の話し合いになっていた。</li> <li>・子ども同士の交流がなかった。</li> </ul>
第7回	<p>【ワークシートの工夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・毎時間同じ形式のワークシートを使っていたので、すぐに取り組んでいた。</li> </ul> <p>【焦点化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・紹介文のモデルがあってよかった。</li> <li>・コンパクトで的確な指示は良かった</li> </ul>	<p>【ワークシートの工夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・書き方の形式があると分かりやすかった</li> <li>・ワークシートを書くときに上と下でずれてしまう子がいた。書きやすくするための工夫も必要。</li> </ul> <p>【焦点化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中心となる活動が分からなかった。</li> <li>・目標と評価と学習内容がずれを感じた。</li> <li>・グループ活動での視点がはっきりしていなかったため、話し合いの広がり、深まりがなかった。</li> <li>・どんな紹介文を目指していたのか、はっきり伝わらなかった。子どもたちもどう書き進めてよいのかが分からず手が止まっていた。</li> </ul> <p>【共有化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・同じ読後感を持った子ども同士で交流させてもよかった。</li> <li>・読後感を交流する場があるとよかった。</li> </ul>

「焦点化」「視覚化」「共有化」という視点に関連して、授業の中で取り組まれた具体的な手立てについて研究協議会の中で話し合われたことが分かる。さらに、表4から「国語の授業づくり」と「ユニバーサルデザインの授業づくり」の2つの視点で整理してみた(表5)。

表5 成果と課題

		成果	課題
国語の授業づくり		<ul style="list-style-type: none"> <li>・安心して自分の考えを発表するための工夫</li> <li>・話や場面の流れの関係、気持ちを読み取る手掛かりの工夫</li> <li>・内容理解のためのワークシートの工夫</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ねらいに向かわせる発問の仕方</li> <li>・子ども同士の話し合いのさせ方</li> <li>・一人一人の読み深めの見取り方と評価の仕方</li> <li>・音読について学年ごとにポイントをおさえた指導</li> <li>・単元を貫く言語活動を考えた単元計画</li> <li>・ねらいと学習活動と評価のつながり</li> <li>・身につけさせたい力を明確にすること</li> <li>・文章の意味理解につなげていくこと</li> </ul>
ユニバーサルデザインの授業づくり	焦点化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・付箋を使った話し合い活動のわかりやすさ</li> <li>・ワークシートの工夫による取り組みやすさ</li> <li>・モデルの有効性</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ねらいに向かう活動</li> <li>・児童の実態に合わせたワークシートの形式</li> <li>・児童が選ぶことのできるワークシートの作成</li> </ul>
	視覚化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・挿絵カードによるイメージ化</li> <li>・板書とワークシートの一致</li> <li>・前時までの学習の掲示</li> <li>・見本や手本の提示</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報の精選</li> <li>・情報量の調整</li> <li>・挿絵カードの有効性</li> </ul>
	共有化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キーワードによる共有</li> <li>・話型を示す</li> <li>・ペア学習やグループ学習の有効設定の仕方</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ねらいに向かう話し合い</li> </ul>

2つの視点で分析すると、同じ手立てが成果と課題の両方に挙がっていた。例えば、ワークシート

を工夫したことが内容理解に結び付いたという成果が挙げられているが、一方で児童生徒のワークシートの書きやすさについては課題として挙げられている。また、視覚化することで話の流れがつかみやすかったという成果と、視覚化をしたために情報量が多すぎてしまったという課題が出ている。「同じ手立てを取ってもそれが適切であったか」「何のためにその手立てを取り入れたのか」「どのような児童の実態に合わせた手立てを考えたのか」「ねらいに向かっていくための手立てになっていたのか」など、研究協議会の中で意見が挙がっていた。指導案の中からは『ねらい—実態—手立て』の関係性が見えにくかったが、研究協議会の中で、ねらいや児童の実態を踏まえることの大切さに気づいたのではないだろうか。

### 3 教師の意識の変化

#### (1) 「取り組みやすい授業」<sup>2</sup>のアンケートの分析

「取り組みやすい授業」のアンケートを作り、年間3回(6月・10月・1月)を実施し、教師の意識の変化を分析した。以下の表はアンケート結果を集計し、各回答の平均をまとめたものである(表6)。

表6 「取り組みやすい授業」アンケート結果

1. 授業の構造化		1回目	2回目	3回目
①	1日の見通しが持てるように、時間割や活動場所やその変更が黒板などでいつでも確認できるようにしている	3.2	3.6	3.5
②	授業の始めに内容や進め方などを提示して見通しを持たせる工夫をしている	2.9	3.4	3.4
③	時間を目に見える形で伝えることで、活動の見通しや時間の区切りを自分で意識できるようにしている(タイマーの活用など)	2.9	3.5	3.6
④	課題が終わったら、次にすべきことを用意するよう心がけている	3.1	3.3	3.5
⑤	板書やワークシートで学習の進め方や段取りが分かるように工夫している	3	3.3	3.5
⑥	子どもがつまづきそうな課題は学習内容の細分化(スモールステップ化)を行っている	3.1	3.2	3.5
⑦	授業がスムーズになるように、授業の進め方にある程度のパターンを導入している(例:課題提示→ワークシート記入→グループ討議→話し合い)	3	3.5	3.7
2. 指導法の工夫				
①	指示・伝達事項は、聴覚的(言語)だけでなく、視覚的(板書、絵や図など)に提示するようにしている	3.2	3.6	3.7
②	抽象的表現・あいまいの表現をできるだけ避け、具体的な表現に置き換える工夫をしている	3.1	3.3	3.4
③	集中の持続が可能なるように、課題の内容や取り組み方に少しずつ変化を持たせるよう心がけている	2.7	3.2	3.6
④	様々な学習スタイルを取り入れるように意識している	3.1	3.2	3.4
⑤	「学びあい」としてペア学習、グループ学習などを取り入れている	3	3.5	3.4
⑥	学習場面で認め合えるような場面を意図的に作っている	3.2	3.3	3.5

1…ほとんど意識していない 2…あまり意識していない 3…まあまあ意識している 4…とても意識している

アンケート結果を見ると、どの質問事項に対しても1回目より平均が上がっており、授業づくりの工夫について意識が高まったとみることができる。

例えば「1. 授業の構造化 ②授業の始めに内容や進め方などを提示して見通しを持たせる工夫をしている」と「2. 指導法の工夫 ①指示・伝達事項は、聴覚的(言語)だけでなく、視覚的(板書、絵や図など)に提示するようにしている」(図2・図3)の回答を比較してみると、3回目では全員が「意識している」と回答している。

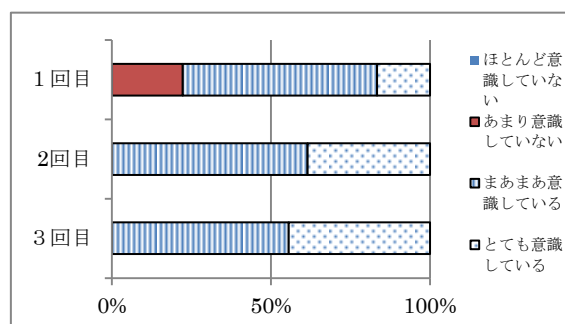


図2 2. ①の回答の比較

<sup>2</sup> 川崎市教育委員会「どの子にもわかりやすい授業をめざして」リーフレット 2013 参照  
山形県教育センター「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり」 2013 参照



「見通しを持てる授業の工夫」「視覚化」について教師が意識し、取り組んでいたと考えられる。これは、校内授業研究だけでなく、日々の実践の中で取り組んできた成果であり、授業づくりの工夫として学校全体の意識が高まってきたことの表れだと考えられる。

これらの授業づくりの工夫は「取り組みやすい授業づくり」としてだけでなく、「授業力」という視点からも考えていくことができる。川崎市総合教育センターでは「授業力」について「にっこり」「めりはり」「つながり」「はっきり」「しっかり」の5つのキーワード<sup>3</sup>を提案している。めざしたい授業の具体例には以下のようなものがある。<sup>4</sup>

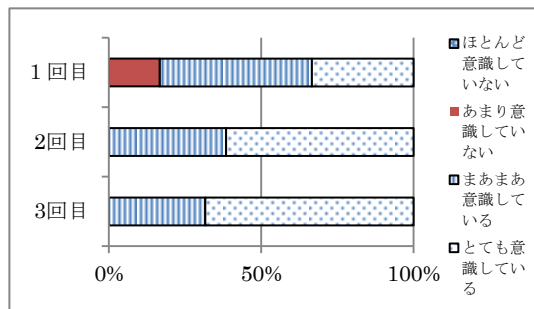


図3 2. ①の回答の比較

<p>〈めりはり〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・書いて掲示することで、学習活動をいつでも確認することができ安心感が生まれる</li> <li>・学習活動の時間や形態の目安を伝え、学習の道のを示す</li> </ul> <p>〈しっかり〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・図や絵を使って焦点化することや、視点を当てたいところに色を付けることによって、何について考えたらよいかははっきりする</li> <li>・視覚に訴えることで、子どもたちの興味をひき、理解を助ける</li> </ul>
---

これらは、先に述べたような「見通しを持てる授業の工夫」「視覚化」と一致する。つまり、「授業力」という視点からもより教師の意識が変化してきたと考えられる。

## (2) 「授業の振り返りアンケート（記述式）」の分析

毎回授業研究会の後に「授業の振り返りのアンケート(記述式)」を実施した。「国語の授業づくり」と「ユニバーサルデザインの授業づくり」の視点で、回答を分析した。

「授業の振り返りアンケート（記述式）」には、「国語の授業づくり」の視点と「ユニバーサルデザインの授業づくり」の視点から感じたことを記入してもらっている。下の表は各回の研究協議会後の「授業の振り返りアンケート」を集約し、キーワードになるものをまとめたものである(表7)。

表7 「授業の振り返りアンケート」の集約

第2回	<p>視覚優位・聴覚優位→掲示物・キーワードの視覚化→50インチモニターの工夫・掲示</p> <p>1時間の授業の見通し・授業の全体像⇄今どこをやっている</p> <p>教室管理・環境整理</p> <p>ワークシート→一人一人に合わせて</p>
第3回	<p>掲示物</p> <p>ワークシート・ヒントカード</p> <p>全体へのユニバーサル⇄個人へのユニバーサル（焦点化、視覚化、共有化）</p> <p>→黒板とワークシート</p> <p>ユニバーサルは特別な物ではない。普段の中で</p> <p>学び方にもユニバーサルがある</p> <p>活動のメリハリ</p>
第4回	<p>誰もがわかりやすい授業</p> <p>→誰もが楽しめる授業（取り組みやすい、わかりやすい、学びやすい）</p> <p>情報は必要な時に、必要な量を出す（視覚・聴覚）</p> <p>座席・環境の配慮</p> <p>子ども同士の価値づけが大事</p> <p>発問が子どもにとってわかりやすかったか</p> <p>焦点化・視覚化・共有化は何のために？</p>

<sup>3</sup> 川崎市総合教育センター 「授業力こだわりハンドブック～笑顔で授業を語ろう～」 2011

<sup>4</sup> 川崎市総合教育センター 「授業力こだわりハンドブックⅡ～授業をみつめ 授業を語ろう～」 2012

第 5 回	視覚化は何のために（挿絵の使い方） 刺激の量を考える ユニバーサル在意図を明確にしないと、やりすぎになってしまう →「ねらい」に向かう手立てとして考える 気持ちの視覚化も必要
第 6 回	児童にとって「わかる授業」というのは「ねらいがはっきりしている」「自分の考えが持ちやすい」 →何を焦点化するのが大事・ねらいやめあての焦点化 短い言葉と挿絵でまとめるとわかりやすい ユニバーサルという言葉が具体的にわかった →国語の教科のねらいにせまるための手立てとし、ユニバーサルデザインがどう生きていくか 図式化や個々の想像力に応じた手立てが必要
第 7 回	子どもに何を学ばせるための手立てなのか 単に焦点化・視覚化・共有化というだけでなく「何のための」「誰のための」を意識する必要性 →単なる How to になってはいけない →教師の満足に終わらない 教師が児童のためにと考えている手立てが本当に児童のためになっているのか 何を、どのように、何の目的での意識を持つ

これらのキーワードを基に教師の意識の変容を追ってみると以下ようになった。

第2回	「ユニバーサルデザインの授業づくり」としての手法や具体例を見つける
第3回	普段の授業の中で「ユニバーサルデザインの授業づくり」につながるものがあると気づく
第4回	「ユニバーサルデザインの授業づくり」の目的と課題について考え始める
第5回	教科のねらいと「ユニバーサルデザインの授業づくり」を結び付けて考えることに気づく
第6回	教科のねらいに迫るための手立てとして「ユニバーサルデザインの授業づくり」を考える
第7回	「ユニバーサルデザインの授業づくり」では「誰のための」「何のための」手立てなのかを考える

校内授業研究の回を重ねるごとに「ユニバーサルデザインの授業づくり」に対する意識が変わってきていることが分かる。初めは「ユニバーサルデザインの授業づくり」の手法などに意識が向いていたが、次第に教科のねらいと結び付けて考えるようになってきた。「誰のための」「何のための」手立てなのかを考えるようになったということは『ねらい—実態—手立て』を結び付けて考えるようになったということではないだろうか。それは、教師の大きな意識の変化であり、研究協議会で何度も話し合いを重ねる中で培ってきた授業づくりの視点ではないだろうか。

### Ⅲ 研究のまとめ

#### 1 研究から見えてきたこと

「支援が必要な児童生徒に配慮した授業づくりについて、年間を通じて校内授業研究で検討することにより、教師の意識が変化し、日々の実践につながっていく」とした研究仮説について考える。

##### ① 教師の意識の変化

教師のアンケート集計の結果によって明らかなように、「取り組みやすい、わかりやすい授業づくり」について意識し、実践してきたと考えられる。いくつかの授業の工夫を「焦点化・視覚化・共有化」で価値づけすることによって、日々の授業の中に取り入れることができた。今後は、「適切な手立て」「ねらいに迫る手立て」として意識してきたものを当たり前に取り入れていくことができれば、より授業力向上につながっていくのではないだろうか。

## ②『ねらい—実態—手立て』を結び付けていくこと

「視覚化」をすればわかりやすくなると思った手立てが、情報量の多さにつながってしまい、有効な手立てとなり得なかった。さらに、「表現に着目して読む」という国語のねらいにとっても有効な手立てとなり得なかった。「表現に着目して読む」ことができるようになるために、言葉を視覚化してイメージを持ちやすくするのであって、挿絵などから読み取っていく訳ではない。研究協議会の中でも話題に出ていたように、「何のための、誰のための手立てなのか」という視点に立って考えていかなければ、過剰な手立てになったり、不適切な手立てになったりする。つまり、『ねらい—実態—手立て』をつなげて考える事がとても大切なのである。今後、指導案に『ねらい—実態』が結びつくように明記すること、そして実態から支援の手立て、ねらいへと結びつけて考えていく必要がある。どのような実態把握を校内で行っていくとよいのか、ということも併せて検討していく必要があると思われる。

## ③「国語の授業づくり」と「ユニバーサルデザインの授業づくり」の関係

「国語の授業づくり」と「ユニバーサルデザインの授業づくり」の2つの視点をもって分析してきたが、2つの視点で分けて考える事が難しいと感じた。そもそも「国語の授業づくり」にしても「ユニバーサルデザインの授業づくり」にしても、どちらも教科のねらいを達成していくことには変わりはない。つまり、2つの視点で分けて考えていくものではなく、「国語の授業づくり」としての手立てを考えるとときに「ユニバーサルデザインの授業づくり」の視点を取り入れていく、と考えたほうがよいのではないだろうか。「ユニバーサルデザインの授業づくり」の視点を意識しなくても、支援を要する児童生徒も包括した授業づくりが行えるようになっていくことが大切なのだと考える。

## ④ 校内授業研究の有効性

このような年間を通した校内授業研究で「ユニバーサルデザインの授業」を取り上げたことは、実践的な知識・指導法を得ることができたと考えられる。また、今までの支援の手立てが「ユニバーサルデザインの授業づくり」につながっていることも改めて認識できたと考えられる。

教師の意識の変化は、学校全体が研究協議会を通して見えてきた課題について自分の授業を振り返ったり、他の実践を見て学んだ授業の工夫を自分の授業に取り入れたりすることで生み出されたものである。単発で終わる授業ではなく、同じ視点を持って1年間校内授業研究として取り組んだからこそその成果ではないだろうか。また、教師の授業に対する意識は確実に変容しており、それが児童生徒の姿の変容につながるものと考えられる。自分の学級の実践だけで終わったならば、次の学年に引き継がれることはなく、児童生徒のさらなる変容を望むことはできないだろう。また、一人だけの実践であれば、手立ての広がり、深まりを望むことは難しかっただろう。

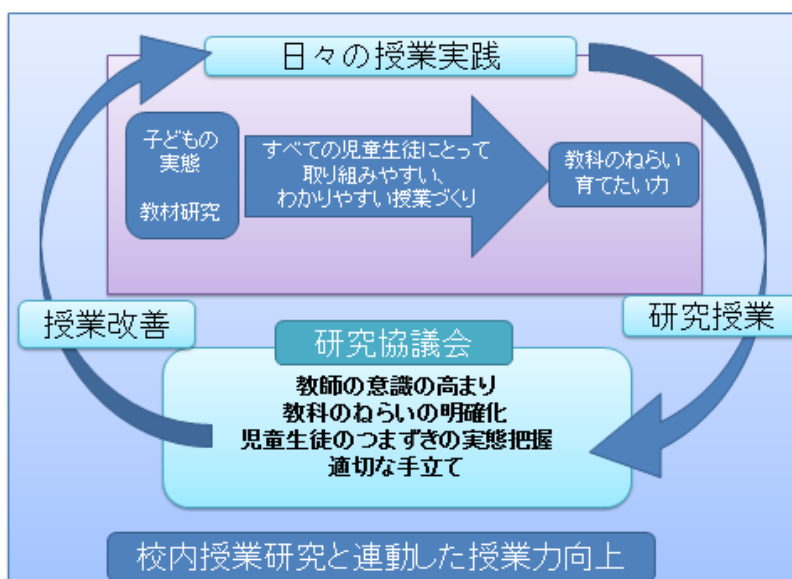


図4 校内授業研究と連動した授業力向上

校内授業研究を通してお互いの知見を高めあい、同じ目標に向かって取り組むことで色々な視点を

持って授業を考える事ができた。そして、学校全体の授業力を高める大きな力となったと考える(図4)。

## ⑤ 校内授業研究の運営

校内授業研究は本来1つの実践から見えてきたことを次の授業につなげていき、学校全体の授業力を向上することが目的となる。研究協力を依頼した小学校においても、その意識は見て取ることができるが、より進めるためには、もっと全体会で共通理解を図っていくための議論も必要になるだろう。全体会の在り方についても併せて研究の位置づけとすべきであったと考える。

## 2 今後の方向性

冒頭にも述べたとおり、「ユニバーサルデザインの授業づくり」は、発達障害の子どもたちがつまずきやすい点を配慮したり、児童生徒の実態からより取り組みやすく、わかりやすくなるように工夫したりする。そして、「個に対する手立て」だけでなく、様々な実態の児童生徒を視野に入れて「すべての児童生徒に対する手立て」として考えていく。

「学級にいるすべての児童生徒」にとって「取り組みやすい授業」「何をするかわかりやすい授業」「学びやすい授業」を作っていくためにも、カリキュラムセンターと協力して「授業づくり」についてさらに研究を深めていくことが必要になる。また、本研究を通して、校内授業研究によって学校の授業力は向上することが明らかになった。今後はこの成果を広げ、いろいろな学校の実践に結び付けていきたい。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言をくださいました講師の先生方、また、校長先生を始め学校教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼申しあげます。

### 【参考文献】

- 授業のユニバーサルデザイン研究会 桂 聖 石塚謙二 編著 『授業のユニバーサルデザイン Vol.6』 東洋館出版 2013年
- 桂 聖・小貫 悟編著 西尾市立西野町小学校著 『文学授業のユニバーサルデザイン』 東洋館出版 2014年
- 佐藤 慎二著 『通常学級ユニバーサルデザイン』 東洋館出版 2014年
- 川崎市総合教育センター「授業力こだわりハンドブック～笑顔で授業を語ろう～」 2011年
- 川崎市総合教育センター「授業力こだわりハンドブックⅡ～授業をみつめ 授業を語ろう～」 2012年
- 川崎市教育委員会 「どの子にもわかりやすい授業をめざして」 2013年
- 山形県教育センター「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり」 2013年

### 【指導助言者】

川崎市立小学校特別支援教育研究会長（川崎市立下布田小学校長）卯木 昌史  
川崎市立中学校教育研究会特別支援教育部会長（川崎市立宮前平中学校長）山本 浩之